

文学的文章の教材解釈力の育成

国語教育講座・三浦 和尚

1. 授業の概要

この授業の位置づけは、国語科教育の基盤としての文章読解力に見通しを立てることである。特に文学的文章について、その教材研究のあり方を考究するとともに、教材研究の一領域としての作品分析の方法を、中学校・高等学校の具体的な教材の分析を通して明らかにし、教材分析力を身につけることができるようにした。

講義を軸に授業を展開したが、具体的な作品分析においては、学生相互の関わり合いを大切に、学習者の立場に立った相互批評を行うことで、教材としての分析の視点を強化するよう心がけた。

また、今年度は、教材分析としての作品の急所を明らかにするよう、作品分析について研究発表形式を取り入れた。この点が、前年度からの大きな変更点である。

概論的内容確認のため、拙著『読むことの再構築』をテキストとして用いた。

作品分析の実際として、作家論的アプローチ、作品論的アプローチ、読者論的アプローチという方法を提示し、「走れメロス」(太宰治)を取り上げ、実際に分析した。そのためのワークシートなどの工夫を意識して行った。また、国語科教授能力を意識して、朗読・読み聞かせに力を入れた。

2. 授業評価の方法

面談法と感想記述を中心としたアンケート法によった。全受講者数は38名である。

3. 結果の概略と感想

グループによる話し合いを多く取り入れたため、講義は少なくなったが、学生同士が自分たちで議論する場が増え、それは却って学生にとっては面白いものになったようである。文学的文章の解釈について、それが以下にむずかしいものか、ここの読みが以下に統一されにくいものかという実感は生まれたように思われる。それは、教材解釈力の必要性を体で感じることに繋がったと思われる。

いかに、いくつかの学生の感想を挙げて、評価とする。

A 私は3人で「デューク」の発表をしました。最後の教材研究の発表は、準備は大変でしたが、深く読むこともできたし、いろいろな人の読み方や感じ方、意見も聞くことができて、とても勉強になりました。国語はやっぱ奥深い教科だなあと思った。国語は「たった一つの答え」というものが決まっていない場合が多い。しかし、子どもの感じ方にまかせる、という形にすると、道徳のようになってしまおうし、教材の研究はすごく大変で、なおかつ大切なものであると感じました。それから、私は人文学科でいつも授業を受けているので、教育学部の人と授業を受けると、教材を見る視点ひとつにしても違っていたりするので、面白いなと思いました。とても勉強になりました。

B この授業はとても参考になりました。国語の授業を考えていくということで、個人的な自分の作品の鑑賞を、全体的なレベルに高めていくためにも、きちんとした目標や、そのための段階的な学びの積み重ねが必要なのだと感じました。先生の書かれた本を読んだり、他の人の考えに触れたりして、自分が国語という授業で作品の面白さを伝えることや、何にどう具体的に重きを置いて指導案を構成していくのかということの、今、自分が持っている知識や理解はまだ未熟で不十分なものと痛感しました。一般的に要求されるレベルでの読みができていない私が、独創的な、ある意味自身の強みになるような読みができず、今後の課題になると思います。自分の力を考えさせられる授業でした。

4. 今後の課題

学生の感想に次のようなものがある。

- ・ 板書計画について少し触れてほしいと思った。
- ・ もっといろいろな作品を例に出してほしかったです。

前者は、国語科教育法 で取り上げる。後者については、発表形式がどのくらい必要かの判断の中で対応したい。